

著者略歴 明治43年奈良県に生まれる。

昭和9年東京帝国大学文学部美学美術史科卒業。

昭和14年，池谷賞，24年，透谷賞受賞。

主要著書 『日本の橋』『戴冠詩人の御一人者』『古典論』『後鳥羽院』
『風景と歴史』『詩人の生理』『日本に祈る』など。

日本浪漫派の時代

昭和44年12月20日第1版発行
東京都新宿区払方町27

保田與重郎 著
東京(260)2211(代)

発行所 至文堂
発行者 佐藤泰三

與重郎



庚子

刊行

日本浪漫派の時代

目次

一つの文学時代	七
記憶の時代	三
反省について	三
今は昔の譚	五
風潮と抵抗	五
史観生成の理	七
時代の環境	九
「コギト」の周辺	一五
在野精神のこと	一九

日本文学の系譜	一三三
日本浪漫派の気流	一四五
日本浪漫派の気質	一五七
文学の意趣	一七一
日本浪漫派廣告	一八五
近代終焉の思想	一九九
わが文学の教師たち	二二一
今日の回顧	二三三
昭和初年の文壇	二三七
日本的の論	二五二
文明と無明	二五五
文明開化の終末	二七九

昭和初年の帝国大学	二九二
進歩主義の偽瞞	三〇五
徒党と学校	三一九
発想の新しさ	三三三
わが「日本文学」	三四五
後記	三五七

一つの文学時代

今上御大典の年から、昭和十二年南京陥落の年までを、この十年と区切つてみる。私が旧教育制度下の高等学校の文科生となつて、多くの仲間、後年文芸上の友達を知つたのが、その御大典の年だつた。つまり私個人の「日本浪曼派」の濫觴といへばいひうると思ふからである。さうして私らの出した雑誌の「日本浪曼派」の方は、皇軍南京入城の翌年も出てゐたが、私の感じでは、そのころになると、僅か十二年の間に、文学といふものも、それに対する人々の思ひもずる分に変貌したと思ふ。この人々といふのは、文学に志をもつた人々といふ意味である。しかしこの志といふものも、大東亜戦争終戦詔勅發布後二十年余りのこのごろでは、よほど刻明に注釈するか、むしろ物語小説の形で、往年のやうな巧みな文芸作者が描いてくれない限り、もう大方に新しい今時の人にわかつてもらへぬと思ふ。これを時世の移りといふのは味気無く、間違つてゐる。文学に対する思ひとか、志といふものは、わが文明が記録としてのこされてこの方、即ち千五百年文学史の期間を通じて、大東亜戦争中も初めごろはかつく保持されてゐたのである。しかも戦中戦末ごろには、むしろ戦場の若者の心に日本文学の志は深く切なく広く生きてゐた。わが国の文士が、文学の志を失つてゆく過程は、さういふ前兆状態に発奮して始つた「日本浪曼派」の終末期の放散してゆく短い時期にも見られる。

南京陥落の夜は、歳末だつたが、記憶ではものういまでに暖かな夜だつた。その夜更、銀座の裏通りは、行人稀にて街頭を勢つてゆくと我々数人以外に何ものも無かつた。それは極めて印象的な無人だつた。浮いたものも、うはべのものもなく、むしろ肅然たるものが万象を清浄にして、天地静止するの感だつた。一人が高吟すれば、忽ち世界は、一瞬寂莫の情たゞよふやうな、すがくしく澄明の中に、一抹耐へ切つたものたゞよふ雰囲気であつた。この時萩原朔太郎が、南京陥落の詩をつくられた。日本中の全詩人を代表してつくられたやうなこの詩品は、予め用意されてゐたものかも知れぬが、感情高なり、しかも悲壯感の氣品に欠くるところ

ない佳品だったが、戦後出版の先生歿後の作品集は、みなこの先師の作を省略した。これを軍国主義の作品と
きめて、皇軍讚美との判断からはばかつたものだらうか。如何さまにも、淺薄な便乘的判断であり、また非文
学的見解、わが国の「文化人」の意識と自覚のうすさ、あさを証した恥かしい一例である。それは近ごろ隣
国の教養の低い若者らの振舞にも通ずる「アジア的なもの」に他ならぬのであるが、隣国の若者の文化破壊に
は、革命とは潔い捨て身と稚く思ひ込んで、絶対者への帰一が、自己を放下した無慚さに現はれてゐるのは、
残忍ながら卑怯でない。しかしいづれも高い人間の次元の行為でないことは共通してゐる。わが国の「知識
人」と称するものの、見識の低さや文化の浅さは、そのころも今も、卑怯や不潔としての行為で現はされた。
この風は、すでに、戦前昭和初年に十分に芽生えてゐた。「日本浪漫派」の出現も、さういふ状態に対する全
面的、無視的、嫌悪感的拒絶が一つの根柢だった。我々は若かつたので屈託なく、簡単に吐きすてる態度だつ
た。たゞかういふ非礼不快の語を、そのころの我々は、我々のうけた教育の影響の下に、己れ自身の襟度から
つつしんで表白しなかつただけである。否定と拒否を全面的に表現しつゝ、しかもなほ耐へ難きに耐へるとい
ふことを知つてゐたのは、教育の結果のやうである。

そこには、一種の絶望に対する態度が、我々の新しい世代の場合として考へられた。今日から、少し冷静に
見て、当時の一般思潮界や、文芸全般の情態を分析してみると、年少客氣の自分らのその日の思ひも、多少冷
静に解明しうるやうに思ふ。言ひ足りなかつたことも、言ひ過ぎた誤りも多かつたことと思ふが、百年もきの
ふのやうな、過ぎた時代のことを回想してみると、私は改めていふことが、もしも弁明に通ずるならばといふ
ことに慄然とし、怖れる。私らが、昭和以前の教育で、家々のしきたりと教へられたことは、卑怯を最も憎め
との教誡だった。それはまた弁明を忌むことである。そして弁明を忌むことは、近代に於ては生存競争界裡を

落伍することであり、そこには世俗的没落がある。しかもかういふ弁明に立脚する態度は、ヨーロッパでは、ギリシヤ人の後は、非徳とされてゐなかつたことが、我々の人生觀にとつては極めて不都合だつた。さういふ場合、多少デカタンといふ態度は、西欧社会に於ける東方的な態度だつたが、東洋の魂にとつては、それすらもまた不都合だつた。

日本の普通の家庭の教へでは、卑怯を最も嫌つた。しかし日本の昭和初年のインテリゲンチヤと称した「文人」又は「知識人」の間では、さういふ土民的な氣配は極端にうすれてゐた。その結果、最も良心的で正義と勇氣をそなへた若ものは、自己の周囲にある絶望を大凡そにみとつて了つた。現実的にいふと、文學も思想も空白といふ時代が、昭和初年に現はれてゐたのである。この事實を叙述することを、近頃の人々がためらつてゐるやうに見えるのは、一つにはそれを知らないからと思ふ。それを知らないから、偽りの言論にまよはされたり、当時に卑怯だつたものの、さらに倍加した卑怯な言ひ訳けの言説にまどはされてゐるのであらう。しかしこの当時のおとし穴のやうな斷層を知ることが、本當に、次代の日本の民族の世代に必要だと思ふ。さういふことをよくわきまへようと感じてきた世代の萌芽が、昨今急にむく／＼と動き出してきたことを私は力強く知つた。若い時代の心に自ら発芽してきたやうに見える。隣国の無智の青少年らの盲目的行為が、日本の若ものの心の土壤をゆりうごかし、そこにねむつてゐた種子を目ざめさせるとの判断は、無きにしも非ずである。乱極つて治至るのは、旧時代の歴史的經驗の智慧であつたし、また蒙昧の極端のものが、人心の酔平たる眞智を啓くに役立つといふ例も、歴史的經驗の知識である。昨今の隣国の少年らの破壊と毀ちの行進には、彼ら自身意識せぬ形で、進歩的「知識人」といふものの卑怯に対する、肉体的な嫌悪感があると思ふ。このこと

は同類の日本の進歩的「知識人」が考察しても視察しても決してわからぬと思ふ。隣国では最も卑しい「文化人」たちがまづ摘発された。この段階は、権力闘争より低い。権力闘争よりもつと低い次元で、一人の「文化人」は弾劾され、それに対する彼の弁明は、さらに低い卑劣な次元でなされ、そしてそれを日本へ仲介した一老政治家は、人間として最も恥かしい卑しい心術で、その弁明の代弁をしたのである。我々日本人は、戦後といふ命目で、さういふ最低の心術の持主を、政治家として遇してゐたのである。かういふ負目は、この二十何年来無数にあつた負目の一つだが、かういふものを、我々は、民族の子孫に対し、どういふ形で償つておくべきか、私は今それを考へることで心勃勃である。

われらの「日本浪漫派」の前夜は、我々の見解では、国の詩文は低調にて、精神の空白化した時代だつたが、戦後の二十年の腐敗は思ひ及ばぬものばかりだつた。従つて、今日の状態で、今を去る三十年ないし四十年以前を語るとは、如何ほどの困難と、細心と忍耐とを必要とするか、思へば意外のものばかりある。さらにそれを語ることは、無駄な冗談を必要とするやうに見える。私は今も、前方に光明を見てゐる。闇の中に、一点の光を見る。闇といふものが、如何に厚つばい、重々しい、深い遠い垂れたものかといふことと、さういふ完全な闇の中にも一つの点の明るさがあつて、それはぼうと白く、霧の中の明るい小さい穴をなしてゐて、しかもその穴からは、いくら外をのぞいてみても、仮相の形象の何一つも見えないといふことを、私は丁寧に知つた。これは経験である。自分の指先さへ見えない深い木の間の闇夜よりも、なほ厚い閉され垂れ下つた闇があつたことを、私は、戦後にまざまざと経験して知つたのである。しかし私は自分がその闇の住人となる「不安」を毛頭も意識しなかつた。

しかしそれを知つた時に、私は三十年以上の以前に、自分がぼんやりと考へてゐたことの中に、さういふ闇

のあつたことを明らかに悟つた。しかしさういふ闇を経験したその瞬間と、それに対する自分の意識といふものについては、今と三十年以前とは差異があることを思つた。

今上御大典の年に我々が偶然に形づくつた「ユギト」の仲間が、年齢でいへば各自の十代の最後に考へた詩文の思想は、その後少しも進歩しなかつたと、今でも、我々の「むかしの人」たちは口をそろへて冗談する。十年ののちにも、二十年ののちにも、さうして四十年の後さへも、とむかしの人は淡々と語つた。

私の精神の上では、「ユギト」の比重は、「日本浪漫派」といふ主張より、はるかに大事だつた。「ユギト」をどうしてつくつたか、といふことではない、單純に生れてきたものの、条件と環境をていねいに回想しておくことが、私の「日本浪漫派」説となる。他の人々の場合と少し異なるものもあらうし、また全く異つたり、矛盾する時もあるだらう。しかしさういふ矛盾は、隣国の実践的権力説によらなくとも、我々はヨーロッパ近代思想の一時期にあつたイロニーといふことで表現する史的知識をもつてゐた。さういふさま／＼なものを簡單にのんびりとつゝんだものに「日本浪漫派」があつた。それをつゝむもの、つゝむ根源の理念、またはイメーヂといふものは何であつたか。このごろ若い人の書くさういふ解釈をみると、みな懸命で熱心な態度を疑はないが、我々の往時と異なるものを痛切に感じる。それを俗談平語の調子でいふと、国家社会への志の濃淡であらう、人道とか世界に対する態度の有無と極言してもよろしいかと思ふ。もつと曖昧なことばできつとしていふと、「革命」かないのだ。私は「ユキト」に「日本浪漫派」の結成の広告を出した時、ざつと見渡したところ、大正から昭和初年に亘つて、わが国の詩文と文士に、「革命」は全然なかつたのである。その見渡した時の舞台は、まことに粗末で低いものだつたが、子規が写生説唱道の時に使つた舞台より少し高い梯子だつた。かういふことを、その当時はこんな暢気な表現でかくことは出来なかつたが、人生老いを知つて、やうやく怠

けを自得するものである。

もつとも「革命」がないといふことは、いはゆるプロレタリア文学が印刷物の上に充満し、それは夥しい浪費をなし、さういふ「知識人」は雲集し、そして文章に「革命」の血が流れてゐない、「革命」を内蔵した文章の一つかけらもなかつた。さういふことは、人々がすべてう、そいつは、りにゐたといふ單純な現象でない。まともな人が懊悩せねばならぬ一種の精神の空白時代をつくつてゐたのである。若者を甘へさせるか過激にするかの岐路だつた。

観念上のうそいつはりや、知識上のうそいつはりでもよいが、もつと根源的な、いふならば人間の領してゐないところの、神の知るしめすところでのうそいつはりは、普通の人間には漠然と知らされる。それを人間の最底辺の条件と見て、それを良心といふのはまだ未しい、到つてゐない、未しく到つてゐない時に「不安」が起る。昭和初年の日本の、相当高い教養をもち、その教養は今日の一般「文化人」の粗末な教養より、どこかに思ひつめた一点をもつた実行的教養をなしてゐたものだが、さういふ前代の教養を残存した昭和初年の「知識人」の口にした「不安」は、軽薄な環境や条件や、そのもとの社会意識論で解決できるものではない。また解釈したと思つたものは、いつはりの人々である。それは人の心をうつことがない。

さういふいつはりの人々の中で最も露骨な、偽善の人々は、当時の東京帝国大学経済学部の中のマルクス主義者たちだつた。さういふ人々に共通する、一応マルクス主義を立場としてゐるといふことは、世渡りの上での一辺倒の態度の頑迷固陋な反動性となり、さういふいつはりのものを形成してゐたのである。それは淺薄で皮相的だつた。しかも当時の東京帝国大学経済学部が内部で派閥争ひを起すやうな時には、平素の学説より

も、学閥の徒弟制度の方が先行し強かつた。さうして東京帝国大学経済学部の反動的一辺倒マルクス主義の予言が、当時の軍部の情勢分析や、満鉄調査部の報告につきぐに破れて、しかもみぢめと單純をあとにのこしたことが、実に当時の心の素直な学徒に悲劇的な結果を及したのである。さういふ当時の人物の名前を口にすることを、私は今日ではもう不快といふくらゐだが、一こるは憎く思つてゐた。しかし彼らはいつでも、神とか人道とか愛とかいふ類の神聖な權威とは無関係であるが、第二流的政治権力に結びつくことに於ては、最も得意にて、また恥知らずなもの耐へうる効果をあげることが出来た。これも隣国の無智に近い教養のうすい若者らが、素朴に判断した今日のことばで表現すれば、プロレタリアのふりしたブルジョアといふこととなり、さういふ者らに三角帽をかぶらせて街頭をひきまはした心境に私は同情する。その個々の人物がそれにふさはしいかどうか、その点は私に全然わからぬが、さういふ人間がうよくゝゐて、世にときめく時があるといふことは、くれぐれも了解し、見聞を久しく重ねてきたからである。かういふことは、年ごろの経験が教へてくれるところで、さらに世間の渦の外にあるやうになつて、いよくよくわかり、それに腹立つよりも、なさけなくあはれと思ふことである。さうして隣国の暴力団のやうな青年らの正義派的表现で「反革命」といつてゐるのは、全く私の数十年來の経験にびつたりの表現と思つたりする。

しかし東京帝国大学に於ける反動化に匹敵するやうな現象が、京都大学にもあつた。京都大学文学部哲学科は、以前にはわが国近代の青年らのヒューマニズムの一基盤だつた。その学派の少壮学徒らが、始め処女の如くに新興科学と称へ、終り脱兎の如くにその旗の下に傾斜した時、革命を口にするところの、実は「革命反動」なるものの昭和初年のタイプはつひに極まつた観があつた。これらも、当時の青年学徒らの虚無化と、不安の二つの基盤だつた。この理由に世界的恐慌や不景氣の影響度をいふものは、けふの時点、けふの心の持ち方か

ら、既往を判断するといふ誤謬が多い。少くともけふの時点では想像を絶した程度に、当時の学生には、「理想」が日常のくらしの中に生きてゐた。理想といふものを前方に置いて、いつもものを考へ、ことを振舞ふといふ氣風が、非常に濃厚だつた。それらのことは、どういふ統計や報道記録にも出てこない、文芸がそれをしてしるし描いて後代に伝えることが出来るだけである。今日何らかの公式主義の考へ方をする若い人々が、さういふ教へられた形式で考へ、文学芸術を後として、経済統計や犯罪記録をさきとするやうな究明方法をとつてゐるのは、史学的方法として大へんな誤りである。現在昭和二十年代から三十年代の前期にものを学び教へられた若い年代は、最も卑しい者や卑しくなつたものに、卑しい方法で、卑しいことを教はつたといふことを、一度反省してみる必要がある。たしかに卑しいと納得し、しかもそれを自分の責任で反省するものが、次代のまことの变革精神の核となることを私は信じてゐる。かういふ機微に關聯するところを文学にゆだねて、「日本浪漫派」は、当時の「プロレタリア文学」と稱へたものを、言論上では大上段に構へて否定したのである。

「コギト」の初期に、私は無氣力化といふ言葉の傍へ、ディアレクティクとルビをつけて使つてゐた。當時は何でも弁証法の時代だつた。その弁証法の時代が、私には我慢できない氣持のいら／＼だつた。私は、イロニーといふことばでものを考へた時代が、ドイツの十九世紀初頭青年たちのわかい時代の怒濤期にあつたことを思ひ起した。それが少しいぢくられてイロニー的弁証法といはれ、僅かの期間をへて、ヘーゲル風の弁証法が固定する人心の移りを考へ、ハイネのベルリン弁証法の蜘蛛の糸といふやうな悪口が面白かつたので、ものを内部で考へるなら、イロニーでよいと知つた。さうすると矛盾といふやうな、弁証法がさらに脳軟化したや